

生涯にわたって
社会のいたるところで学ぶための方法序説
講座づくりへの5つの提案

松田 道雄

提案・生涯学習講座事業を運営担当する際に、「事務職」としてでなく、「教育（学習支援）職」という心持ちを持つつやがいがいを見出していきましょう。

今回は、実際に公民館や生涯学習などの現場で学習講座を企画運営なされていらっしゃる各地の皆様方に提案していることを紹介します。以下の5つの視点です。

その1 安易に講師を依頼せず、その経費分を地域教材費に取り入れた講座づくりも工夫する。

学校の場合は、大学で教職課程を修得し、教員採用試験に合格した人が、教員として児童・生徒に授業を教育実践として日々行っています。しかも、教育研究の義務もあるので、学校

内では先生方どうしの授業研究も行われ、常によりよい授業のあり方を改善しています。筆者も約20年間の中学校教員時代には、たくさんさんの授業研究を行い、諸先生方からのアドバイスを受け、授業改善の努力をしてきました。「先生がしゃべるのが目的ではなく、生徒が考え、生徒がしゃべるようにすることで、教師は給料をもらうのだ」といったアドバイスを、その時に学んだ経験は、今の様々な生涯学習事業の現場の支援に活かされていると。

一方、公民館などで生涯学習・社会教育の学習講座を担当されている職員の方々は、生涯学習推進員や社会教育指導員という役職名などで事業実践されていますが、大きな枠組みでは、「教育職」ではなく「事務職」としての立場になっているかと思えます。実際には、人々の学習を支援する「学習支援者」とし

ての意味での「教育職」の役割で人々が学ぶ現場を運営実施しながらも、一方で「事務職」という立場の意識が、どこかで仕事の自身（教育実践）に「一歩踏み込む」ことを躊躇したり、遠慮したりしているということはないでしょうか？

自分は教育（学習支援）職ではなく事務職だから、講座の仕事は、テーマの中身を話してくれる講師を探してお願ひし、当日は会場設営、受け付け、講師紹介などをして、あとは時間が終わるまで講師にお任せする、という流れでなされているのではないのでしょうか。

しかし、このスタイルの講座を、受講者（学習者）側からあらためて見直すと、受講者はただ講師の話をだまっけて聞くというだけの講座になっています。聞くだけの学習は、聞いた内容は数日すればほとんど忘れていくということは多々あります

（特に歳をとればとるほど）。講座終了後に書いてもらったアンケートに、「とてもいい話でためになりました」という感想が書かれていても、それを書いた人は、1週間後には、その話の内容は、ほとんど忘れていくかもしれない（多分そうでしょうね）。

ともすると、これまでの講座企画実施が、学習者の立場に立って考えられているのではなく、実施担当者側の都合や理解で行われているということはないでしょうか。

受講者（学習者）がより豊かな学びの実感を得る講座にするには、安易にすぐ講師を依頼することを考えず、その分の経費で、地域内の様々なことがらを「教材」として購入して体験学習をしたり、地域に出向いた体験学習をしたり、学習成果を冊子化したりすることに予算を使った学習の可能性を考えてみるこ

とかく、地域資源と言うと、地域にある文化財や歴史遺産などだけを思いがちですが、地域にあるすべては「教材」になります。例えば、近くの喫茶店と連携してコーヒーを「教材」にすれば、そのコーヒー豆がどこから仕入れられてくるのかを探り、高校の探究学習のようにして、「コーヒー豆」を学ぶことから世界の貿易問題（不平等問題）に視野を広げることができ、また、コーヒーハウス、カフェ、喫茶店といった人間社会の「コーヒー文化」を学ぶことに広がれば、地域生活やコミュニティのあり方を考え深めていくこともできます。

まさに、どこにでもある身近な地域のコーヒーからSDGs（持続可能な開発目標）を考える学習に発展していくことができます（この場合、喫茶店主を「講師」として招く予算の中で、

店主が実演で提供してくれる「コーヒー」を「教材」にすることもできるでしょう。さらに、受講生が地域をまち歩きして、現在の喫茶店（コーヒーチェーン店）の分布地図と、回想や聞き取りをもとにした、かつての喫茶店や商店などの昭和の地図作成も行い、それらの学習成果を地域の印刷所に簡易製本してもらい、今度はそれを「教材」にして読書会を開く展開を思い描くこともできます。

忙しい大学生や社会人と違って、「今日用事があることに感謝する」シニア世代の方々にとっては、自分が生きてきた人生とも重ね合わせて、仲間とじっくり、地域を「教材」に地域社会と自身の生き方を考え深める「大人の探究学習」は、シニアならではの「教養（今日用）教育」になることでしょう。

講座担当者が、「事務職」という気持ちから一歩脱皮して「教育（学習支援者）職」の役割も担っているという意識を少しでも持つことで、結果的に、受講者の学習はより豊かに深まり、その事業運営体験を試行錯誤していく経験が、担当者皆様にとって職業教育としての豊かな学習体験になり、「仕事実利」という実感を得ることにつながるのではないのでしょうか？

その2 受講者のロールモデルになる等身大の講師を探す。

安易にすぐ講師を求めようとしない学習者本位の学習展開をいろいろ想像することができると書きました。先のコーヒーから学ぶ事例案では、「コーヒー」を「教材」にする代わりに、それを提供してくれる喫茶店主に講師になってもらって、講師費を支払うこともできる（その中にコーヒーの「教材費」も含まれる）ことも提起しました。

そのように考えれば、地域にいらつしやるたくさんの方々を企

画することができます。

例えば、ものをつくる「造形」を学習テーマにする場合も、造形作家だけでなく、同じように手を動かしてモノを形作り、それを売って生活をしている地域の和菓子屋やパン屋の方もりっぱな「講師」になります（実際に筆者自身は「学習支援者」として、大学の授業でも地域の和菓子職人やパン職人の方を講師に招き、学生は豊かな学習体験を得たことがあります）。さらに以前、子どもの放課後文化を考える生涯学習課の講座では、地域の駄菓子屋の店主（おばあちゃん）が「講師」になった時があります（その時は、店主のお話のサポートを筆者がしました）。

講師というと、すぐそのテーマの専門研究をしている大学研究者などに講師を依頼することが多いのですが、もし、その講座の目的に、これを学んだ受講者が地域で活動することも

期待する場合には、「あの人がそのようなことをしているのでは

れば、私もできるかな？私もしてみよう！」という気持ちで喚起させ、実際にその方々ともつながって活動をおこしていくことができるような地元的事業者や市民に講師になってもらったほうが効果的でしょう。そのような「等身大の講師」を地域から見出し依頼することで、その方々にとっても励みにも学習にもなります。地域全体の住民生活の「底上げ」のためには、「講師枠」も含めて地域人材を大切に育てていくという中長期的な視点も大切です。

その3 受講者どうしが話し合う場面を設ける。

すべての学習講座の後半に、受講者間で話し合う場面（隣どうしや小グループで）を設けましょう。その話し合いを進行するのは講座担当者の皆様方です。その経験を重ねながら、より学

び深め合える進行、つまりファシリテーションの力量を皆様方が職能として高めていくことができ

ます。講師を依頼する場合も、後半の話し合いの時間を確保することを前提に依頼し、全体の時間配分や講師の役割などをうちあわせ、調整します。なぜ、受講者どうしで話し合う場面が必要なのか？それは、同じ話を聞いても、一人一人受け取り方は皆異なるからです。自分が受け取ったことを他の人も「同じように思っているはずだ」と思い込むことが、そもそも、すべての人間関係の問題の原因で、また、自分の学びを狭く貧しいものにしてしまいます。

話し合い学習を入れると、「自分とは異なる意見に気づくことができ、視野が広がりました」、「多様な考え方に気づくことができました」、「みなで話し合うことで新たな発見をすることができました」といった振り返りをよく聞きます。他者とともに学

び合うことで学びを深めるというのは、まさに、このことなのでしょう。

さらに、その学びの豊かさとともに、実際にその人との人づき合いを深める機会にもなることも重要です。特に、平日の日の生涯学習受講者は在宅シニア層が主なので、孤立防止とつながりづくりをめざす地域福祉とも共通の重なりがあります。公民館などでの学習講座やサークル活動を通じて、住民どうしがつながり、親睦や互助の安心感を醸成する「地域の居場所」の役割も果たしているのです。「語り合い・学び合い・助け合い」が平日中の在宅シニアの学習目標になるのではないのでしょうか。

講座担当者が事務的に講座を実施するのではなく、「〇〇さん、おはようございます。今日もお元気ですか？」と、受講生個人に声をかけ、受講生どうしも声をかけ合うことができる場。

平日日中の学習講座は、そのような「地域の居場所」なのです。これからの長寿社会では、ますますその様相は重要になります。それはつまり、学習講座を担当

実施される皆様方は、「教育（学習支援）職」という役割からさらに踏み込んで、ケアの様相も含む「福祉職」の役割も心がけていく必要があるということだと思います（そう考えれば、もっと報酬を上げてしかるべきではないかと思えます）。

その4 アンケートを「満足したか」から「何をどの程度学んだか」に変える。

一般に、講座の最後には受講者にアンケート記載してもらいます。その質問項目は、「本日の講座は満足しましたか？」といった満足度を問う設問になっています。しかし、「満足したか」という問い方は、ファミレスなどのアンケートのように、回答者を学習者ではなく、消費者・

批評家（さらにはクレイマー）にします。生涯学習の目的は、他者を批判することではなく、学ぶことによって自分自身をよりよく変容し続けていく当事者意識を高めていくことです。そこで、講座始めに、講座後に

「あなたはどれくらい学び深めたか」を問うアンケートを書いてもらうことを伝えてから講座を始めることによって、受講者は主体的に「自分ごと」として学ぶ意識を持つて学ぼうとします。事業担当者も講師の評価は、受講者の満足度ではなく、受講者が学んだ内容と深さ（よく学んだか）になります。さらに言えば、生涯学習の評価は、その後（二年後でも数年後でも）、受講者がどのような生き方をして

いるか、どのような活動を行っているか、といったことなのでしよう（この評価は、受講者とのつながりをその後もつくっていれば可能です。本連載23年1月号安西春樹著「対話によるふり

かえりて気づきを得る」HP公開参照）。

その5 講座実施後に作成した報告書はネット上にあげる。

全国の公民館や生涯学習課で、毎日実に多くの学習講座が行われていますが、どのような学習が行われたのか、私たちはよくわかりません。インターネットがなかった時代は、他の公民館などでどのような取り組みを行い、どのような成果があったのかわからないので、会議や研修会を開いて集まって、事例報告したり、学び合う場が重要でした。もちろん、今もそれはあります。しかし、平時さらに重要なことは、講座を計画実施したあとに、上司にだけ紙で事業報告書を出すのではなく、全国の同業者がネットのキーワード検索で閲覧できるように、A4用紙1枚程度に簡潔に事業報告をまとめて、PDFでネット上にあげておくことでしょう。都道

府県の研修会などは、ネットでの研修の内容と成果の報告を見ることができるようになっていきます。そこまでを講座実施担当者の仕事の役割とすることで、次年度以降の事業担当者も、全国の講座事業をキーワードで検索して閲覧参考にすることができま

す。そうすれば、どの職場に勤めていても、意識は全国的なスケール感覚を持って仕事ができ、全国の職員が講座づくりの学習を常時深めていくことができるのではないのでしょうか。

以上、全国の生涯学習講座を担当なされていらっしゃる皆様への提案を差し上げあげました。筆者は、各地の学習講座の支援をしています。公民館などで実際に市民の方々に対して学習講座を実践されている方々は、本誌を読まれていない（公民館で本誌を購入されていない）方が多いかもしれません。

教育委員会で本誌を購入されて
いて読んでくださっている社会
教育主事の方々には、ぜひ現場
の講座担当者（生涯学習推進員
や社会教育指導員などの方々）
に、「こんな提案あるよ」と紹介
いただければ幸いです。そこか
ら、「もっと、こんな視点も重要
だ」、また「こんな悩みがある」
などお聞かせいただければ幸い
です。ちなみに、この筆者の提
案も現場担当者の方にとつて的
外れなことでは申し訳ないと思
い、あるまじの生涯学習推進員
の方に原稿を読んでいただきま
したら、次のような感想をもら
いました。

特に、その5の内容が画期的
なうえにすぐにでき、ぜひ全国
に広がって欲しいと感じました。
私の町でも、職員が知恵を絞っ
て企画した講座でも、募集をか
けてみると、こちらがイメージ
していた年代と受講したい方々
の年代にギャップがあったり、

内容のイメージが正しく伝わっ
ていなかったりと、毎度ふたを
開けてみないとわからないのが
現状です。全国の事例を参考に
しながら、自分たちの自治体の
ニーズに落とし込んでいけたら
効果的でとても助かることだと
思います。

市民の方々に直接学習講座を
ご担当なされていらっしゃる皆
様方がますます仕事へのやりが
いと充実感を持たれることが、
全国民の学びの充実に直結寄与
することになるかと思えます。
皆様の講座づくり、より一層ご
期待申し上げます。

（まつだ・みちお 皆様の学習講
座づくりの応援します！）
尚綱（しょうけい）学院大学
教授（宮城県）
連絡先：(m_matsuda@shokai.ac.jp)

※本連載、本誌HPに無料掲載
中！

新刊 社会教育の再設計：シーズン3 新書判
～未来への羅針盤をつくる知の冒険～
社会教育を拡張する草の根の取り組み

西上ありさ・横山太郎・上田假奈代
・栗栖真理・竹原和泉・小池良実

発行 日本青年館 2022年11月 新書判 80頁 編著「学びのクリエイターになる！」実行委員会
定価660円（本体600円＋税）送料140円 ISBN978-4-7937-0142-9

社会教育の再設計：シーズン1 新書判
～未来への羅針盤をつくる知の冒険～
『社会基盤としての社会教育再考』

寺協研・山崎亮・小田切徳美・吉田博彦・牧野篤

発行 日本青年館 2020年12月 新書判 160頁 編著「学びのクリエイターになる！」実行委員会
定価880円（本体800円＋税）送料180円 ISBN978-4-7937-0140-5